

〔講演〕

東亜同文書院生による中国大調査旅行と近代中国像

愛知大学名誉教授 藤田 佳久

小林 これから講師のご紹介をいたします。藤田佳久先生です。藤田佳久先生の専門は地理学です。1940(昭和15)年、愛知県生まれ、愛知学芸大学(現愛知教育大学)学芸学部卒業後、名古屋大学大学院文学研究科に進まれ、東京教育大学(現筑波大学)で理学博士を取得されました。その後、名古屋大学教育学部付属高校教諭、奈良大学助教授、愛知大学文学部教授及び東亜同文書院大学記念センター長を歴任され、2011(平成23)年3月、定年により愛知大学を退職後、愛知大学名誉教授、東亜同文書院大学記念センター・フェローに就任、現在に至っています。主な著書は、『東亜同文書院・中国大調査旅行の研究』、『東亜同文書院が記録した近代中国の地域像』、『日中に懸ける 東亜同文書院の群像』など、多数ございます。それでは藤田先生、よろしく願いいたします。

藤田 失礼します。ただ今ご紹介頂きました、現在は名誉教授になってますが、藤田と申します。私の書院研究と言いますか、地理学からスタートしまして、書院の方々の大旅行記録ですね。これを読むことからスタートして、もう三十数年になります。その過程で、東亜同文書院のずいぶん関心を持ちまして、書院の方々の古い方から色々聞き取りを始めたわけです。

その第1号の方が、長崎の方です。第9期生、1909(明治42)年に入学された斉藤文雄さんっていう方で、お住まいは長崎市街の少し東北の方の、傾斜の山を越えて、ちょっと向こうのところですが。そこへたどり着くのになかなか道が細くなったり、曲がったりしてまして難しかった記憶

を思い出しますけれど。その方にお会いに行ったわけですが、ご家族の方々が「先生が来られるのを心待ちにされてます。まるで恋人が来るように、もう来るか、もう来るかと、非常に首を長くしてお待ちしてました」ということで大歓迎を受けたことがございます。この方は、書院の9期生、実はその前に6期生が、当時私が調査を始めた頃、一番古い方でしたけれど。その方も約束を取りながら、大学の教授会が急遽開かれたりして行けなかった後、急に亡くなられてしまったんですね。非常に残念なことをしたんですけど。次にお古い方が、この長崎の斉藤さんでしたので、長崎までわざわざ飛んで来たことがございます。この方は、9期卒業後、清国人の経営する問屋さんに、丁稚奉公に入ったんです、今流に言うんですね。書院の卒業生でそこまで



やった方はなかなか多くないんですけど、斉藤さんは商取引等を一生懸命勉強するために、実地にそこに入って、清国の商慣習を全部修得したんですね。したがって、のち、独立して非常に成功されたわけです。非常に順調だったんですが、やがて日中戦争が始まりまして、上海ですから、世界情勢が少し早めに分かった。次第にこれは危ないというわけで、上海から長崎へ奥さんとお子さんを先に帰したというわけです。そしたら上海にいましたから、長崎に原爆が落ちたということを知りまして、戦後、長崎へ帰ってくる時も、もう非常に傷心で帰って来られたわけですね。もう会えないだろうと。ところが長崎へ戻ってきたら、奥さんとお子さんたちが生きてたんですね。ちょうど山かげになって、直接の光は浴びなかったけれど、ガラスの破片が体いっぱい入って、それでも何とか命を取り留めたということでありました。そういう点では、斉藤さん本人にとってみれば、大変な喜びであったわけです。ところが、原爆の後の長崎の街では仕事がない。というわけで、何をされたかという、屑物拾いを始めたそうです。屑物拾いを始めると、今度は道路を管理している警官といつも軋轢が生じた。警察官ですね。喧嘩ばかりしておったけれど、その内仲良くなって仕事も軌道にのつたと。後には、紙間屋さんを興して、それで成功されたということでもあります。お宅で長崎ちゃんぽんをご馳走になりましたけど。その時は大変美味しかった。というふうに覚えております。朝から夕方遅くまでお話になって、もう明日一日来てほしいと、非常に熱望されたんですけど、もう随分、お年でもありましたから、初日だけでその時は帰らしていただいたんですね。

そして、宿へ泊まってから長崎の中心部へ歩いて、ちょっと試しに出掛けようかなと思ったら、今日来てます、長島君という、繁華街のど真ん中での出会いがあったんですね。彼は長崎出身の一年生で、入ったばかり。私もゼミで、授業で持ち始めたばかりですけど。似た人物がおるなあと思ったわけで、近づいたら、本人も気が付いて、そこで珍しい対面をしたということでもあります。それ以来、今日も来ていただいております。

すけれども。そういういろんな出会いがあった調査でありました。長崎の書院卒業生の方々も色々な人生を伺っていますけど。今日も42期の小崎(昌業)先生の同期の方々もおられますし、書院出身のお父さんの娘さんには、廊下で先ほどお会いしましたけど、いろんな方々がお見えであります。今日は私はそういう中で、主に書院の人達が行った大旅行調査ですね。これを中心に少しお話をさせていただきます。

この図は、非常に有名な書院の三羽ガラスと言いますか、三聖人と言いますか。そういう方々であります。一番右が根津一という院長、長いこと院長をやられた方ですね。大きな構想を持ったのが、左の二人で、荒尾精。この人が貿易実務を中国と日本、当時清国ですね。そこ提携することで東アジアの安定と列強からの防波堤ができるんじゃないかという発想ですね。左の近衛篤磨という方は、先ほどもちょっと出ましたけど東亜同文会の会長として、アジアの教育文化事業を中心に行うという趣旨で、昨日お話があった東京同文書院のほか、朝鮮とか清国のいくつかの学校の経営をすすめました。東亜同文書院は、その最大の学校になるわけであります。その時に、荒尾精のビジネススクールという発想がその中に取り込まれて東亜同文書院がスタートするわけであります。

歴代の院長をつとめた方々はこんな方々で、左上から下までずっとありますが、左下の方が、先ほどの篤磨さんのお子さんである文磨さんですね。東京裁判の前の日に自殺されたという方ですが、書院の院長でもありました。東亜同文会の会長でもありました。右の方の一番下の方が一番最後の学長(大学昇格により呼称変更)で、愛知大学を作られた本間喜一という先生であります。学長であります。こんなかたちで、愛知大学が本間先生によって作られた。この辺は昨日お話がありました。ただ初めてお聞きになる方もおられるかなと思って、簡単にちょっと復習をさせていただいたわけではありますが。左側は岸田吟香という方です。左上が若い時、右下が晩年の顔ですね。その息子さん岸田劉生という絵描きさんですね。この方のこの、

女の子を描いた絵は色々ご覧になったことがあると思うんですけど。そのお弟子さんがこの愛知大学のロゴマークを作られています。東亜同文書院大学という名前は、当時のGHQ(連合国軍総司令部)の管理のもとでは大学が大陸にあったという理由で使えませんでした。そこで昨日もお話があったように愛知大学を作ったわけでありまして。先ほどお話ししましたビジネススクールとして、東亜同文書院をスタートさせた荒尾精という方は、明治の10年代に早くも清国へ渡って、貿易用の商品資源を見つける。それには清国をきちんと把握する必要があるというわけで3年間、単身でまだ見ぬ清国へ渡ったと。その時に上海ですでに岸田吟香という方が、「楽善堂」を開設していたのです。日本で最初の国際商人ですよ。横浜で目薬の処方にも長けたヘボンと知り合って、上海で英語と日本語の辞書を作る。活字を日本で求められないので、上海へ一緒に行って作った。そしてそこで、ヘボンが大成功、ヘボンの目薬ですね。当時の清国の薬事情というのは非常によくありませんでした。そこへ新たな目薬を売ったのです。目に入るように、筆の先に汁をつける用法は画期的でした。その名は「精錡水」といいましたが、それを岸田は継承して売り、それが大ヒットして、財を成したわけでありまして。この荒尾精はこの岸田吟香を頼って、上海へ行って、清国事情を、色々教えてもらって。国の真ん中にあります、漢口ってありますね。清国の、一番真ん中ですけど。そこへ「漢口楽善堂」という支店を作って、その時に日本から若者が次々やってくるんですね。この若者が何で来たかということは、西南の役で西郷軍について九州の人達が多かったんですけど。今、NHKで「八重の桜」ってありますが、東北のほうの列藩同盟の人達、皆敗れてしまっていて。新しい明治政府のもとでは、もう活躍できないと絶望した若者たちが大陸へ渡って一旗揚げしようという希望を持ったのです。そういう人達は、ほとんど20歳代です。荒尾精も20歳代ですね。先ほどの、近衛、根津も皆さん20歳代の人たち、これがまたすごいところですが。そういう若者が同じ若者を集めてあちこちの調査をさせたんですね。

しかし、色々言葉も違うし、風貌も違ったり、いろんなことがあって殺されたり、行方不明になったりしてしまっただけで、そこで荒尾精は帰国後、きちんとした貿易実務学校が要るっていうわけで、日清貿易研究所を、1890(明治23)年に作ります。上海にですね。約150人の学生を集め、ビジネスマンを養成するわけなんです。その時、荒尾は清国の実地で調査研究した資料を根津一にまとめさせ、その成果を『清国通商総覧』という2000ページぐらいの大作にまとめ、刊行します。中国の実態を初めて日本人に知らせたっていう、非常に有名になった本ですが。その中に出てくる地名ですね。どのぐらい調査をやったのかっていうのが分かるように、清国の中で出てくる地名をずっと片っ端から地図上に落としてみました。ほとんど全域にまたがってたんですね。膨大な情報を荒尾精は集めて帰ってきたわけなんです。行くにあたっては、当時軍人でありましたから。軍籍を外して行きたいという本人の希望を、とにかく陸軍は許さなくて、そのまま軍籍を持ってたほうが便利であろうということでありましたが。帰ってからこの軍籍を脱ぐわけでありまして。その本の中には貿易品の見本がたくさん入ってます。銅版画できれいですが、これは銅製品です。こういうようなもの商品見本が沢山あって、十分清国との貿易ができるということでありまして。ところが、日清貿易研究所は日清戦争が始まって、財政の問題もあって、5年後につぶれてしまいます。日清戦争が終わった後、昨日のお話にあったように、それまでの東亜会と同文会が合併しまして、東亜同文会が誕生するんですね。1898(明治31)年ですね。全体のリーダーとしては近衛篤磨公がリーダーとなって、清国の教育文化事業を目的の前面に押し出してくる。東亜会の方々のほうはむしろ政治的な言論中心の方でありましたけれど、近衛篤磨公がそういう動きを抑えて冷静なかたちで組織をはかったのです。そして清国で教育事業を展開するというわけなんです。各県をまわって学生を寄こしてほしいと。東亜同文会といってもお金がありません。民間団体であります。近衛篤磨公を始め、先ほどのリーダー達が日本の各県の知事をまわって、県費で学生を

寄こしてほしいと。日清戦争に勝った後でしたから、各県も清国に関心をもったと思いますね。最初の年は予算が決まってしまった後の運動でしたから、少し少なかったですけれど、2年目ぐらいから60人、70人が集まるようになりました。後でもちょっと出ますが、長崎県は全部で5千人の卒業生のうちに、250人ぐらい、第3位であります。第1位は福岡、第2位が広島、第3位が長崎というわけで、長崎のご出身の方が非常に多かったのです。ですから、我々そして長崎の中国との交流史を長崎の方々にもっと知ってほしいと。今回この催しをするにあたって書院の最後のほうの卒業生で、地元出身の方にお会いした時に、長崎でのこの会の開催は遅すぎるって怒られてしまったんです。もっともなお叱りです。これについては、長崎市長にこういう会をやるっていうのを知らせよって言われましてですね。私、市長にも手紙を書いて、この催しがありますよということを伝えたことがあります。公務が忙しくて出られないけれど、どなたかは出せるようになりますという返事をいただきましたけど。そうってますからね。

最初は修学旅行で清国を巡ったんですね。これは最初、山東半島への修学旅行の書院生による記録です。細かい話は外しますけれども。このあと、日英同盟が1902(明治35)年に結ばれますが、その中でイギリスからシルクロード沿いの新疆方面の状況がイギリスにとっては分からないけども、ロシアがどんどん清国に入り込んできてほしいと。その情報をつかんでほしいということで、日本の外務省に依頼がありました。日英同盟下の依頼ですね。しかし、日本の外務省は清国にそういう情報網を持っていませんでしたから、十分応えられないと。その時に上海に東亜同文書院があるということで、外務省側が根津院長にお願いをしたと。院長は第2期生がちょうど卒業する時に5人を、その中から選抜して西域の調査を依頼したのです。今の新疆ウイグル自治区から外蒙古、モンゴル(共和国)ですね。これはその内の一人の、その時の波多野養作。彼は今の北九州市、八幡製鉄が立地する前の八幡村出身です。中学から柔道をやってた

方で、体の丈夫な方が選ばれたんじゃないかと思います。その方の旅行の写真です。こんな感じで行ったんですね。夏は兩岸の天山山脈とか崑崙山脈から雪が溶けて川が大洪水を起こすため、なかなか徒歩の旅ができないっていうんで、冬、河川が凍った時を狙って行くんですね、氷の上を。こういう服装を見てもなかなか寒い中の大変な大旅行で、往復2年かかったわけですね。これは途中で馬車に乗った時の写真です。しかし下が砂利の道ですから、しばらくすると痔になってしまう。これが大変な悩みで、どうにもしようがなくなった時に、現地の各地に欧米の宣教師の人たちを訪ねたんですね。あの人たちは当時、お医者さんでもありました。痔の手術をしてもらったり、静養したりして、また次を旅するということで、列強の宣教師の人達の医学力に舌を巻いておるわけですね。そういう異国の地に奥深く入ったのが東亜同文書院の学生たちです。日本人として初めての本格的調査だったんですね。こんなルートで入りました。ずっと奥地の方、今のロシア国境まで行ってます。行くに1年近く、帰りに1年近く歩いてます。今でしたら北京からジェット機で3時間ぐらいで着いてしまいますけども、当時はもっぱら歩きですね。しかもマalariaが当時、清国には広がってました。彼はマalariaにかかって1週間熱が出た。そうすると日記が書けない、そういう記録が残っております。そういう記録をもとにして色々復元してみたわけですね。

その内のもう一人、林出賢次郎という方ですが、この方はなかなかよくできた方で、のちに書院の学生監の役をやったりした方です。先ほどの小崎先生のお話にもありましたように、小崎先生はこの方に相談をして、内モンゴルへの「大旅行」に行ったということです。指導者であり教育者でもあった方です。この方は帰校後にシルクロードの奥地のほうのモンゴル族の王様からもう一回来てほしい、先生になってもう一回来てほしいって招かれて、また行ったんですね。すごいことではありますが、大変だったろうなと思いますけれど、二度もシルクロードの奥地を経験されたのです。その後、満州国ができた時は

溥儀の実際の付き人になった。ところが溥儀の味方ばっかするっていうんで、首を切られてしまった。首をほんとに切られたわけじゃなくて、役を外されてしまったというほうですね。

しかし、5人の「大調査旅行」は大成功したので、このあと外務省から、書院へ3万円のお礼があった。そこで書院の学生諸君はそれまでのような修学旅行だけじゃなくて、本格的なこういう大旅行をやりたいということで、何度も学校側にも要求をするんですけど、学校側もお金がないということで、なかなか実現できなかったんです。早速、1905(明治38)年に入学した5期生からこういうかたちで大旅行が始まります。麻袋の大きなのを持って中国人とは違う服装です。この服装をしないと外国人というふうに認識されない。当時外国人が清国へ入っていくと、それなりに地方政府は保護したわけでありまして。だいたい5月の終わりぐらいにスタートして8月いっぱい、あるいは9月いっぱい。半年なんていう人もいるし、中には1年旅を続けたという記録があります。さすがに帰校してから怒られたっていう話があります。ちょっと旅行期間が延びると秋になってしまふ。夏姿でスタートして、秋、ホームで震えてるのをのちに書院の卒業生が見て、色々世話してくれたなんて記録もたくさんあります。こんなかたちですね。アフリカ探検隊風のなかなか勇ましい恰好ですが。2人から5、6人の班が多かったですね。頑強な柔道部とかそういうような人たちは奥地のほうへどんどんどんどん行った。軍部の意向で行ったのではないかと戦後よく言われましたが、そんなことはなくて学生諸君が自分たちの意志でもって調査テーマとコースを選ぶんですね。そして卒論としての調査報告書と日誌を書いたのです。まさに自分たちで実施してきたというわけでありまして。これは出発する時のいろんな風景、波止場から、あるいは駅からとかですね。こういうかたちで清国、のち(中華)民国や東南アジア各地に散っていったわけです。これはビザです。B3くらい大きいです。この左下のところに、自分たちが巡る先々の県名を書いて政府に渡すと。清国、あるいは民国、これを受けて現地の地県、あるいは県知事に渡して、彼

らに来るっていうことを知らせる。だから彼らが行きますと、もう毎晩、警察官が来て、これを見せろというようなことで、夜中もたたき起こされるので、もうほんとに嫌になるというようなことが盛んに書いてありますけれども。これは今でも中国は外国人が来ると、管理が厳しいですけど、当時から同じだったことが分かります。

これは、旅行のコース図を描いたものですね。上海、一番右のでっばりのところが上海ですけど。そこからあちこち行きますが、思いっきりあちこち巡ってるんですね。なるべく行き帰りは中国各地を見て、目的地へ行って調査をしようという。そういうことがここから表われております。東南アジアとか、昔の満州、一部ソ連と、どんどんどんどん調査旅行コースを伸ばしていっております。私のほうで計算しますと、全体ではだいたい700コースあります。全部で七百コース。最初の諸君はとにかく日本人がこれまで入ったことのないところへ積極的に入っていったんですね。だから随分、日本人たちにとっては初めての情報が記録されており、彼らはそこに生きがいを感じたわけでしょうね。どんどんどんどん冒険旅行のように入っていったわけです。ところが、10年余り過ぎていきますと、次第にコースについては新しいコースが見つからなくなって、古いコースを色々組み合わせたり、新しい調査地を設けたりして行くわけですが、少しコースがだぶって後輩たちがここを通るかもしれないというわけで、後輩たちに情報提供するためにコース毎に日誌がつけられます。朝、何時に起きた、朝、中国の農民から卵と野菜と何とかを買って調理したと。鶏も買ったと。今日のご馳走だとかですね。コースの途中では田んぼがあったとか、畑があったとか、山が崩れてたとか、道路を歩くと雨が降ってきて。だいたい5月からスタートしていきますと、特に中国の中南部は雨季なんですね。日本と同じ雨季。雨がものすごく多いんです。そういう泥沼化したようなところもけっこう歩いて大変な苦労だったんですね。北のほうへ行った人たちはそうでもないんですけど。しかし、思いっきり満州へ行った人達は満州も夏は雨季なんです。夜泊まった土づくりの宿があって、外を見ると

河川が氾濫してどんどん水位が上がってきて、泊まっている土で作った家がどんどん溶けてく、えらいことだというわけで、皆屋根に登って木が流れてくるのを待ってそれにつかまって下流へ流されます。岸といっても河川の兩岸はものすごく平坦ですから。どこまでが岸だか分かんないぐらいのところをずっと流されていってやっと助かった。そんな記録もちょこちょこ出ています。そういう点でいうと本当にアドベンチャーな大冒険旅行をやったわけですね。私もずっと読み込んでいて、本当に各地を一緒になって旅行したような感じで、ときどき夢の中に、私が行ったコースとミックスして出てきたりします。

当時の清国や民国では正確な地図がありませんでした。そこで書院の人たちは地図をとりあえずは作るという作業をやったんですが、今のようメジャーというようなものがそう簡単にはありませんでしたから、どうしたかっていうと自分たちが歩いて一歩当たり30センチとか40センチで決めておいてですね。それで磁石がありますから、方位を決めて歩いて距離を求めて地図を作ったわけです。これは避暑地で有名なところの地図ですね。外国の人たちがよく住んでいるところですね。自分たちの足で実地を調べた図です。今でも中国は正式な地図は[㊦]になっていて、外へは出しません。皆さん方が行って向こうで求められる地図は一種の絵地図であります。そういうのと比較しても、書院生は非常に正確に近い地図を作っています。

歩いてく途中の写真も貴重です。これは函谷関。「箱根の山は天下の険」の歌詞に出てくる函谷関というのがありますが、中原と西安方面との境にある関所ですね。崩れて閑散としてると。人もほとんど来ない。こういうところは土匪、強盗が出て危ないと緊張しています。強盗団というのは元々、清国の時代に黄河沿いで大氾濫が次々と繰り返された際、下流の農民が水害で仕事を失うと、徒党を組んで被害を免れた地域へ行って強盗をする。次の時代の民国期。辛亥革命が成立した後、今度は軍閥間の独立紛争が絶えなくなりますね。ほとんど省単位ぐらいで争うわけですが、そこで敗れた残兵が省境に立てこも

ってさらに農民や町、旅人を襲うのです。私も中国へ、延べにすると50回ほど行っておるんですけど、この奥地のほうでも強盗が出没してる現場を見たことがありますよ。6、7人がチームになって道路の前のほうに2人、後ろのほうに2人、それぞれ監視役がついて、真ん中の2、3人が相手から物を盗るわけですね。したがって、非常に組織化されております。必ず青竜刀を持っている。書院の人たちも最後の局面になった時は少し戦わなくちゃいけないからというような覚悟で行ってます。しかし、護衛兵として書院生一行を保護するために一緒についてきた軍隊が、人気が無くなったところで突然強盗団に早変わりしたなんていう例もあるんです。「身ぐるみ脱がせて殺してしまえ」とか言ってですね。その時、強盗団の裏のほうから親分が出てきて、「お前たちは最後だ、覚悟しろ」というようなことを言われた。見ると親分は青竜刀を持っている。青竜刀っていうのは、首もはねますけど、お腹にさっと突き刺して、ぐっと捻るわけです。腹の中がやられてしまうんですね。致命的で、絶体絶命ですね。その時に親分の顔を見たら、片目が潰れてたと。そこで書院生は、自らの冥土の土産にというわけで目薬をさしてやろうということで、ズタ袋の中から目薬を出すと親分の目にさしてやったんですね。当時の中国の農村の医療事情は、今から比べると相当悪いですから。それで親分は、いわば近代医学の先端を経験して、少し目に沁みたりして、ちょっと効果があったと思ったかもしれませんが、目薬に感激をして、「じゃあお前たちの命はとらないが、そのかわり銭、物はすべて置いていけ」というわけです。裸にされて、そのまま釈放されたという、ドラマチックな記録もあります。

もう一つ、お金は、今の中国は元で統一されていますけど、当時は不統一で、地方によってずいぶん違います。どうしたかっていうと、どこでも使えるように小銀ですね。その塊りを各班は持っていった。それを紐でくりつけて、会計係の人が体にグルグル巻いて旅をする。重たくてしょうがないですね。会計係の人は重労働です。河船なんかに乗る時は、向こうの川はだいたい濁

ってますから、船底の隅にある釘のような、あるいは出っ張りのようなところにその紐を巻きつけて、水中に小銀を垂らしながら行った。それはなぜかっていうと、岸に近づくと強盗団が飛び乗ってきて、皆、身ぐるみ脱がされて取られてしまう。そういうのを防御する知恵です。騎馬といいますか、馬に乗った強盗団(馬賊)も船が通ると、それに並行して馬を進めるんだそうです。ちょっとでも船が岸に近づくと飛び乗ってきますから。そういう緊張状態での旅もありました。そういう旅の最前線でもって彼らが非常に貴重な経験を、たくさんしたわけでありませう。

次の写真です。真ん中の人物は軍閥のトップです。軍閥というと大強盗団の親分みたいなイメージがありますが、実はインテリです。ほとんど日本への留学経験者です。昨日馬場(毅)センター長から、最初に東京同文書院で清国からの留学生を入れたんだという話がありましたけど、あれが契機になって、多くの清国、のち民国の留学生が日本へ来ます。日本で勉強してちょうど戻った頃、辛亥革命後の軍閥争いがスタートして、地域のリーダーになった人たちです。この写真では書院の人達もきちんとした制服で軍閥のトップの人に会っています。この軍閥のトップは有名な唐繼堯という方です。こういうような写真が結構たくさん出てきます。日本語は少し話したということもあったと思うんですけど、こういうような人たちが、一方では強盗団を抑えているところもあったんですね。省単位の経営をめざした、なかなかのインテリであります。中にはそうでなく、戦争ばかりやっている軍閥のトップもおります。後でお話しますが、いかに自分の領域の中を近代化するかということで夢中になって、軍閥同士が競争するというような雰囲気もあったのです。それが現代の中国の原点、近代化の原点だったと言えます。こういう軍閥の人たちのいろんなプロジェクトが、民国の地方の近代化を進めたと言えます。

これは旅行最中の写真です。左上は丸太を組んで、あるいは羊の浮き袋をいくつか結んでその上につかまって河旅をする。それから下は、今の日本からの観光ルートには入っていません

けど、黄河中流の「ユートピア三角洲」というところ。私は今、内モンゴルの砂漠で緑化植林もやっていて、そのまどめ役をしているんですけど、今年(2013年)の3月には今までやっていたところ以外のところも少し色々見て来たんですけど、このユートピア三角洲へ行ってきました。非常によくわかったですね。今までは地図でしか頭の中にはいっていなかったのですが、このユートピアで黄河が氾濫して大きな三角洲を作っているんです。それがまたもとの黄河に戻って流れてゆく。このユートピアはこれも外国人宣教師が開墾・開発しているんです。そこにのち、漢人が入っているわけですけど、そんな場所です。貴重な写真になります。

今度は東南アジアのコースです。東南アジアに関しては、今のタイ(当時はシヤム)以外はみんなフランス、あるいはオランダ、イギリスあたりの植民地でした。植民地について西欧諸国の植民地政策として一番ははっきり記録されていることは、インフラ整備が非常に進んでいることです。鉄道とか道路。これは民国本土以上です。自動車も非常に普及している。書院の人たちは旅行でそういうところへ行くと、日本人があちこち商売、あるいは農場経営をやったりとかいろんな仕事をやっている。そういう日本人のところに行きますと簡単に車に乗せてくれるから、あつという間に次の目的地に着いてしまう。旅行がものすごく速く進んでしまうという記録を残しています。そしてこれら日本人が現地の人たちから非常に慕われて、親日的な人たちが多かった。その背景にはやっぱり東南アジアは植民地下の人たちですから、日本が(対)ロシア戦争で勝ったということで、日本人に対する尊敬の念が非常に強かったことがありました。だから日本人を敬い、色々指導等を日本人がするようになったのです。商売、流通業に従事した日本人も多いんです。というようなことで、東南アジアの対日感情は記録を読みますと非常にいいですね。非常に良好です。そういう記録がたくさんあります。それだけに、今度の戦争で終わってみれば東南アジアから日本はあまり評価されていない。というようなことでありますから、今度の戦争の軍のやり方という

のは、まさに書院生の情報というのはしっかり見られていないといえますか、伝わっていないといえますか、そういうことも読み取れるわけです、逆に。その辺のところはまだ日本の指導者や軍部が国際的な経験に不足した、偏狭な時代だったというように言えるかもしれません。

これは中国の雲南の少数民族地帯に行った方の記録です。この方は現在も、106歳か107歳でご存命の方です。今のベトナムのハイフォンからハノイ、そして雲南の奥地へフランスが作った軌道がありまして、それにしたがって昆明まで行って、そこから北上して長江を源流のほうから上海に戻ってくるコースを予定していたのですが、その途中のコースに強盗団がたくさんいて危ないと現地の領事館から言われたり、あるいは地元の知事から説得されてどうしようということになったんです。行けないのならというわけで思い切りチベットへ行きたい。チベットって大変なところなんですけど、ちょうどチベットからキャラバンがきており、そのまとめ役に聞いたら、何月何日にここへ来れば連れてってやると言われ、それに飛びついたので。中国大陸は一日足で歩くと必ず宿泊所のある町や村があるんです。ところが乾燥地帯に入ったり、チベットに行くとき一日歩いたってそんな町や村はないです。そうするとキャラバンでないと命が保てない。だから書院の人たちも4、5人そのキャラバンと一緒にチベットに行きたいと、急ぎょコースを変更したのです。書院の「大旅行」では、行って帰ってくるのものすごく時間がかかりますから、チベットまで、奥地まで行ったという経験はそうないんですけど、集合場所に行ったって相手が来ない。きっと相手を変更したんでしょうね。そこで思い切ってビルマ（現ミャンマー）のコースへ変更するわけです。これも大変です。地図を見るとすぐ分かるんですけど、南北に長い、非常に深い谷間の川がいっぱい流れています。それを鉄線にぶら下がって超えて、ひとつずつクリアしながら渡って、ようやくビルマの奥地に出るわけです。その途中でこういう少数民族の人たちと出会って、その記録がこんなかたちで残されている。そういう人たちには、ラングーン（現ヤンゴ

ン）からシンガポール経由で上海に戻ってくる大冒険旅行でした。もちろん、物価など調査もきちんとやっています。東南アジアも植民地下でありましたけれど、広東とか華南のほうはこの写真のようにやっぱり軍閥同士の争いがあります。その軍閥の争いの記録も非常に克明です。その争いはもう本当に生々しすぎてちょっと紹介できないぐらいの、中国人同士の激しい争いと言いますか、生々しすぎる戦いなんです。そんな記録も書院の人たちから見るとびっくりしたんでしょうか、記録が結構あります。これはベトナムの日本橋です。日本人が中世の終わりにここまで進出して、橋の上に家に乗せたものです。ヨーロッパにはよくある例ですけど、東南アジアでは珍しいんです。ここは日本でいうと京都みたいなところですね。ユエというところですね。私もベトナムに行った時にユエを見てきました。しかし、ベトナム戦争の時にずいぶん被害を受けたところがあります。

満州事変が始まりますと、中国政府は結果として書院生に2年間ビザを発給しませんでした。その結果、書院の人たちは大陸を調査する予定だったのに、急ぎょ満州しか行けなくなっちゃったんです。事態による突然の変更でしたので、最初の年は班を分けて皆希望をとって満州各地へ出かけたんですけど、あちこちで一緒になってしまう。鉢合わせが多いんですね。だから調査としては急な仕立てをやったもんですから、うまくいかなかったんですね。そこで2年目はきちんと分けてやろうじゃないかというわけで、満州の県別の調査をやります。ただ、民国期になって満州にも民国側の管理組織ができていますですけど、完璧にできているわけではなくて、入った県によってはデータが全くなかったり、あるいは少しデータがあったりとか、ずいぶん差があります。私もずっと近年は満州一帯のこういうデータベースを作りながら研究をやってきましたけれど、県別調査をやったところが面白い。ただなかなかデータのレベルがそろわないので、比較が十分できないという問題があります。

これは前後しますが、先ほどの軍閥の人達の揮毫をもらっています。やっぱり文字が上手で

すね。やっぱりインテリですね。呉佩孚と曹錕という、当時の中国の軍閥としては有名な方です。こういう人達にも会った。それから最後に旅行記を学生たちが、班別のダイジェストとしてまとめますけど、そこに多くの関係著名人が、揮毫を寄せてもらっています。さきほどの軍閥の揮毫もその旅行記の中に入っていますけど。これは犬養木堂(毅)の揮毫です。

この「大旅行」について、最初の頃、左側のほうに縦軸にテーマ、右手にはどういう地域を選んだかを示しますと、こんな表になります。ほぼ全土に広がっております。分野も特に華中あたりはコースが錯綜しますから、班がたくさん出てきますし、かなり広い分野に広がっていきます。このテーマの下の方になりますと、商業活動とは関係のないような教育とかの項目が出てまいりますけど、書院の旅行をしているうちにこういう調査、文化的なあるいは歴史的な、そういう分野も要るんじゃないかという視点が現地で認識されてきます。商業活動を理解する上でもベースがないとわからない。したがって関心がこういうふうに広がっていくわけですね。これはまだ17期から21期ですけど、これからずっと蓄積して、やがて中国への総合的な研究・理解が高まっていくということで、東亜同文書院は東亜同文書院大学として、大学に昇格していくわけです。ただ蒋介石の国民党軍との戦争が始まりますと、旅行できる範囲は非常に限られていきます。先ほどのような自由なコース設定ができないんですね。これは34期の時であります。中には勇敢に一番西の方に伸びて、四川省の蛾眉山あたりまで行った班もあります。多くは香港からずっと北上して北京、天津、それから満州の奉天ぐらいまでの範囲です。戦争が激しくなると、日本の支配地域あたりでしか旅ができなくなってしまう状況になります。これは戦争末期の頃ですね。これは38期生の頃ですね。1938(昭和13)年に入学ですから4年目というと1941年。もう今度は沿岸部が多くなり、漢口ですとか、ちょっとした内モンゴルぐらいが目立つ程度ですね。先ほどの小崎先生はこの時代に内モンゴルのずっと奥地まで入った、個人で入られた。大し

たもんですね、大冒険をされたんじゃないかと思うんですけど。全体として見ますと、こういう状況の中にもかかわらず、戦乱に巻き込まれたり強盗団に襲われて命を落としたっていう人はチームとしては一人もいなかった。これは非常にラッキーなことでした。書院の人たちもその辺のところは心して旅行をされておったんじゃないかと思えます。

現地の人々がそれをどういうふうに見ておったのかというのも色々あります。だいたい先ほどのコースの中でも重複するところがでてくると、書院生がああ恰好で宿に泊まると、書院生は薬を持っている、というわけで泊まった宿に行列ができるわけです。薬をくれ、体を見てほしい。妊婦さんまで並んだというわけであります。それで仁丹、一番効果があったのは仁丹です。中国の人たちにも、仁丹というのは奥地のほうまで宣伝が広まりつつありました。味の素と仁丹というのは当時奥地のほうでは貴重品だったんですね。その仁丹が切れてしまうと薬がないんですが、かわりにライオン歯磨き粉。昔の方は知っている。今のような練り歯磨きではなくて粉ですね。あれを少しつまんであげた。すると明るく日風邪が治ったよと言ってこられたと。そういう面白いといひますか、やっぱり薬を普段飲んでいないところではもう、信ずる者こそ救われるといひますか、そういう効果があるということかもしれません。

これは先ほど申しましたように、各期がどのくらいのコースを設定したかという表ですけど、だいたい10から20ぐらいの間。多い時は、学生数が増えてきて右側の方ですと20から30ぐらいのコースに分かれていきます。全部で合計しますと700コースぐらい。昨日も質問がありました。専門部が誕生した時に、専門部の方々も調査旅行をすぐやるんですね。実は私の表で、その数字がちょっと抜けているんです。そういうのも少し大づかみに入れて700コースというふうに計算したわけですが。この700コース。同じ地域でこれだけ半世紀にわたって繰り返し繰り返し調査を蓄積したという例は世界ではありません。イギリスとかフランスの調査、成果を比較してみてもありません。でも、学生の成果でしようと言う

わけですけど、そう思う方は一度原文を読んでいただくと思うのですが、何せこれはレベルが高いんです。ものすごく高い。私なども読んでいて、これはどこかの専門の人が書いたんじゃないかと思うような文章力。今みたいに漫画とかテレビとかそういうものがない時代ですね。文字力の時代、文章力の時代ですね。きちんと客観的にそれを的確につかんで表現する、という能力が非常に高い教育だったということがわかるわけですね。書院の人たちの記録、これは絶対に経験したこと、見たこと、観察したこと以外は書いてはいけないということですから、非常に信憑性があると思うんですね。700コースありますから。従ってこのデータを使って分析するというのは、十分できるというのが私の考えで、それでこのコースをずっと読み始めて30年ぐらいいたっているんですけど、まだ終わっていないところがありますね。そういう意味でこれをまだまだまとめていかなきゃいけないというふうには思っているんですけどね。私は最初に地理学の立場からこれを見た時に、世界ではこれは知られていないんですね。日本が戦争に負けてしまった。負けてしまったということで戦前の日本はみんなネガティブに思われてる。しかし、しっかりやったことはしっかりやったことで、世界に認知してもらう必要がある。ぜひ東亜同文書院のこの調査旅行、あるいは書院そのものの存在にも、世界的な認知をしてもらいたいと思ったのです。地理学のほうでは国際会議、あるいは2年ほど前ですか、京都でも大きなのがありましたけど、私も東亜同文書院の関係の発表をさせてもらったりしております。世界の人達もずいぶん、聞いた人はものすごく関心を持ってくれる。エエツというわけです。そういうことで、この右手は全部入れるとごちゃごちゃになってしまうので、途中のものだけしか表現してありませんが、中国のメインランドだけ、本土だけのコース図ですね。左はメッシュで切った時、各メッシュに何本旅行線がはいっているのかという本数の密度図であります。だいたい重なるところがいくつかの場所が出てきます。書院生が関心を持った地域ということですね。

今はもうだいぶお年を召した方が多くなってしまったんですけど、今から20年ぐらい前、卒業生の人達に、当時書院の卒業生5千人のうち、1400人ぐらいがまだ存命中だった時代があって、その時にアンケート調査をやったことがあります。古いほうはもう亡くなった方が多かったですけど。一番最近では35期までと、そのあと各期別に46期まで分類してありますけれど、書院から何を得たんでしょうかという質問には、大いにあったというような、ちょっと抽象的でありますけど、清国や民国への理解とか、国際親善とか色々で、アクティブな評価が非常に大きいですね。書院を卒業された方は、どこへ就職しなさい、県のお金で行った人達もどこへ行かなくちゃいけないという義務感は一切なかったです。これがまたすごく面白いところです。自由であった、どこでもよろしい、どんな職業でもよろしい。日本に戻ってきててもよろしいが、多くの人達は書院の精神としては中国でむしろ業を興すと。自分で業を興して中国の近代化に役立ってもらいたいというのが書院の、特に根津院長の願いでもありました。上海で卒業した人たちの就職先です。書院の卒業生の人たちのある時期の就職先であります。だいたい上海周辺、それから北京周辺。満州のほうですね。そういうところの大きい大きな町と地方の中心都市です。この辺が就職した場所です。職業も実業界、商社、貿易関係がメインですけど、次第に色々な新聞が日本人の手によっても刊行されます。そういう新聞社あるいは新聞記者にも多く就職し、あるいは教員とか公務員。のちに満州国ができますと、そこのお役人になった方も結構おられます。それから戦後のデータですと日本へ帰ってきて、大学の先生になった方が八十数人おられます。教授になった方です。新聞社、メディア関係に就職した人もたくさんいて、非常にバラエティに富んでいるんですね。

その調査旅行の成果がどういうふうに反映したかという、最初の荒尾精が原型ですね。『清国通商綜覧』という本があります。これは、荒尾が清国で集めた資料を根津一がまとめて出版されたものです。貿易を進める上での清国での心

得。これは当時の清国の実態を示していて非常に面白いんです。清国を歩いた人でないとどういうふうにして相手を読むか、取引をするかというようなことはわからないわけですね。初めて清国の実態を読んだ日本人達は、それまでの江戸時代、あるいは明治の最初の漢詩・漢文だけで描いていた素晴らしい清国というイメージが覆されます。もっとビジネス的な、実態的な清国像というものが迫られてくるというわけですね。2番目は先ほどの西域旅行の成功。これは旅行の資金を得るきっかけになりますね。それから旅行が制度化されていって、より学術的になります。いっぽう語学は、昨日馬場先生のお話にもあったように、中間業者の買弁ですね。それを通さずに、直に生産者と取引できるレベルの清国語をマスターしなくちゃいけないというわけで、徹底的に発音を学び、当時は文法というのはありませんでしたから、何をやったかという、丸暗記です。これほど強いものはないと思うんですけど。会場に展示してありますように、『支那経済全書』、これは学生の報告書がそのまま活字になったものです。それから『支那省別全誌』全18巻とか、色々ここに挙げてありますけど、こういうかたちで書院の大旅行記録の成果が、ふんだんに生かされたということです。

また、これは『中日大辞典』といいますけど、これは、昨日もちよっとお話があったと思いますけど、戦前、中日大辞典というようなものは、たいした物はなかったんですね。勉強する上で、辞典があると、東亜同文書院側が判断して、色々な先生が集まって編集委員会を作って、『華日大辞典』のためのカード化を始めたわけです。今日そのカードが展示ケースの中に入っております。全部で14万枚作ったんですが、その時に終戦(日本の降伏)で中断。そのカードは国民政府に接収される時に木箱に5箱ぐらいまとめて梱包し、接収に来た一人の方が語学関係に関心のある先生だったというわけで、これは是非保存してほしいと、これは大切な物であるということ伝えてさうです。戦後になって共産党政権になり、日中間の関係が何もなくなった時、書院の最後の学長で、戦後愛知大学を創った本

間喜一という先生が、中国側にカードを返してくれと。それによって日本と中国の間の交流がもっと活発になると、あの続きを作らせてほしいという願いを、日本の赤十字社を通じてするわけです。そうしたら中国側から、日中の人民のためにというような文書が付きながら、返還をしてくれたわけです。その一番の大元締めが周恩来で、実際その実務を担当したのが、郭沫若という人なんですね。愛知大学はその件があって、このカードを中心にして中日大辞典をもう一回編集しなおしていくのですが、ただ戦後、字体は中国はみんな簡体字になってしまっただけです。この簡体字化については、いろいろな説があって、戦後、中国は台湾へ逃げた国民政府と敵対関係にありましたから、国民政府の連中が中国大陸に来て簡体字を知らないから、すぐにスパイとばれるだろうなんてですね。漢字は非常にややこしいですから、いわばそれを簡体字化したのでしょう。日本もそうですね。戦後ずいぶん簡体字化にしましたね。日本と中国の簡体字化の協力関係はありませんでしたから、それぞれの国が別々にやったところがあります。そういうわけで、辞典作成をすべてやり直したんです。そうして13年後(1968年)『中日大辞典』を完成、刊行したわけです。カードを返してくれた周恩来首相を愛知大学では高く評価して、周恩来首相が出た天津にあります南開大学と愛知大学は、日本で最初の中国との大学間協定を結んだわけです。その後も発展して、南開大学には愛大会館という建物もできて、愛大生の語学研修などの拠点になっております。なお、『中日大辞典』ができて中国側には5千冊寄贈するわけです。なかなか評判がよかったですね。私その後中国へたびたび行っている時に、向こうの人の『中日大辞典』を見せてもらうとものすごく厚いんですよ、こんなに厚い。なんと海賊版もたくさん出回っていて、紙が悪いから、ものすごく厚い。そういうのをずいぶん各地で見たことがあります。その後愛知大学の方で現在第3版までできております。時代の中で中日大辞典の内容が当時の中国に対応したかたちで編集されてきていますので、中日大辞典を3冊買うだけで中

国の歴史も分かるといわれております。興味のある方はぜひお求めいただくと大変いいのではと思うんですね。

これは先ほども申し上げました『省別全誌』。学生である書院生の人たちの作品をベースにして編集された全18巻です、最初の頃の。これは甘肅省の表紙です。異なった省を同じような内容でもって、すっとまとめたという、中国では地誌としては日本人の、東亜同文書院生のこの作品が初めてです。中国側あるいは他の国でもこの類の作品は出ておりませんでした。そういう点ではもっと高く評価されてもいいんじゃないかと思えます。もう更に20年経ちますとこれの新しい版22巻も企画されている。今度はより詳細になりますけど、戦争が始まってしまって、半分の9巻で終わってしまっています。しかもその9巻目は幻の9巻。なかなか手に入りません。紙も悪くなってしまっております。台湾で戦後に海賊版が出たんで、私も申し訳ないけど海賊版を手にして見ております。これが新しい版です。「新修」って書いてありますね、一番上に。これは第8巻目、新疆省。一番遠い奥地の省もきちんとした情報が入ってくるようになったということをお知らせしております。こちらは学術雑誌、『支那』ですね。こういう機関誌も、東亜同文会と東亜同文書院、発行元はそれぞれ違うところもありますけど、「支那」の総合研究が進んだ証しです。『東亜研究』というのは東亜同文書院大学に昇格してからの研究機関誌で、さらに今度は広い範囲、東アジア全体を研究しましょうというかたちでテーマが変わっていきます。「支那研究」から発展していったんですね。そのほか色々な単行本が出てます。特に多くの実用的利用価値を持ったのは左側のような民国期の年鑑とか名鑑とか、このようなものはよく使われました。これは今、貴重だと思います。当時毎年刊行していた。そうは言ってもなかなか大変な事業でした。

これが学生たちが手書きで書いた原稿であります。なかなか読みにくい。きれいな字で書いてくれた原稿に出合ったときは本当にいいんですけど、うわーっと書いた達筆すぎる文字は、なかなか読めない。私の仕事が地元の名古屋の

中日新聞で紹介されて、「藤田先生はこれを読める人を募集してる」って書かれたんですよ。そうしたら20人くらい希望者がありました。ありがたいなあと思って、この文面をコピーして送ったら、一人も返事がありませんでした。そのぐらいなかなか難しいんですね。私もこういう読んで出版してきましたけど、書院の卒業生のベテランの方に最後はチェックしてもらいましたが、いくつかやっぱりミスがあるんですね。なかなか難しかった。おかげでいろんな言葉を覚えたんですけどね。

次に、この書院の人たちの旅行記録をどのように見ていくかということです。一つは同じ学年の人たちがずっと調査していく中で、この場所では何語を使っているという記録があるんですね。これはお金の種類ですね。貨幣です。地方によってずいぶんお金の種類が違う。こんなに種類があるんですね。それを分布図にすると、こんなかたちになるんですね。これはそれらお金の種類が共通したものでくりますと、こんなかたちで中国の中の共通貨幣の使用圏がでてきます。これは一種の経済圏を意味してますね。つまり、同じような歴史的な経済のまとまり、経済圏を持っているということが、ここからお分かりいただける。北京を中心にした河北(省)一帯とか、奥の方の盆地を中心にした一帯とか、沿岸部の一帯とか、色々でてきます。今度は言葉です。言語、こんなに多くの方言がたくさんあります。皆さん方も、わかりにくいかな。北京語とか、北京語が通じにくい地域とか、広東語だとか、福建語だとか色々出てきますけど、こういうのをずっと図に落とすことができます。これを括るとこんなふうになるんです。これは一種の同じ言葉をおしゃべりする文化圏といえますね。ですから中国の人たちはこれが異なるとお互いに会話ができないわけで、異なった地方の人たちは、筆談をやるわけです。私なんかは最初も今も筆談ばかりやっていますが、筆談でもって、漢字が共通だっていうのはそういう点では便利だったんですね。ただ、方言ばかりですから、会話はなかなか難しいですね。そこでこれら経済圏と文化圏の二つを重ね合わせると、このようになり

ます。両者が重なったところは文化圏と経済圏を共にする強固な一つの地域のまとまりになるわけです。だから中国はひとつというよりは、それぞれの地域のまとまりがこのようにあるんです。地理学の我々としてはこういうことが非常に興味があるんです。こういうかたちで中国の中を認識して、貿易をする、あるいはお互いに協定を色々結ぶとか、もっと強い交流関係を持つというような場合にも役立ちますね。以上は歴史的ですが、今の中国もベースとしてはこういうまとまりがあるというふうに言うことができるでしょう。

それからこれは阿片用ケシの分布図ですね。旅行記の中に出てくる阿片は、だいたい北西部中心ですね。北西部。山の西と書いて山西省というのがありますが、ここは袁(世凱)という将軍、彼も日本の留学生でした。帰ってから日本的な国を作ると言って、軍閥ですけど、地方独自の理想国づくりを目指した人です。ここは書院の人たちの記録を見ても、女性が夜一人歩き立って大丈夫、治安は大丈夫。交通網も非常にしっかりしているというわけで、ずいぶんベタ褒めです。そして阿片は一切禁止。だから、西側に黄河が南北方向に流れていますが、その東側が山西省です。山西省側はないけれど、その黄河沿いに隣の省が、だあっと猛烈に阿片用ケシを作っているわけです。黄河は谷間ですから、向こうの斜面にはいっぱい阿片用ケシが埋め尽くし。山西省側はないんですね。こういうことも行われておったことがよくわかります。だいたい奥地の乾燥地帯が阿片用ケシの栽培地だったということがわかります。日本軍が戦時中に阿片を作らせたというようなこともよく言われるわけですけど、そういうのはまだこの分布図には出てきません。

これは強盗団ですね。先ほど申しましたように強盗団の由来から見ると、ほとんどこの時代、軍閥の時代の落し子です。軍の間の争いが非常に激しかったですから、敗れた連中が省の境目ぐらいに生息している。だから省から省へ渡り歩く時が一番危険なんですね。そういう状況が記録の中で、今日は強盗団の噂を聞いた、あるいは出沒した、市中が焼かれてしまっていると

か、よく出てきます。そういうのを中心に図を作りますと、こんな分布図になる。

これはこの前、反日の暴動がありましたけれど、戦前も21カ条要求とか、五四運動とか、あるいは五三〇事件を契機とする、排日・排外の運動がありました。特に五三〇事件は全国に初めてナショナリズムを広げた大きな出来事であったと思います。これは、日清汽船の建物が焼き討ちされた写真ですね。この前、日本資本の商店が焼かれたりしたのとかぶりますが、戦前からこういうのがあったんですね。書院生は、5月の中旬までに旅行に出発した後、五三〇ですから、5月30日に上海で起こった事件。これが各地にわあっと広がって、旅行へ行っていた先で石をぶつけられたりとか、現地の学生から討論会を要求されたりとか、行く先々で日本人が来るけど泊めさせるなとか、物を売るなとかいうようなかたちで妨害をされたわけですね。論争なんかでクリアしたところもあるんですけど、そういう記録の残っているところを分布図にしたもので、こんな図は今までないと思いますよ。

図の一番左上(北西部)の方の黄河の乾燥地帯のところでも、こんなところは行ったってなかなか町がないわけですから、そんなところで締め出されると学生たちも食い物がなくなってしまう。もう大変なので、ほうほうの体でコースを変えたりして、それを回避したというような状態が当時の記録から読めます。上海近郊にもあったと思うんですけど、旅行班は上海からずっと外へ旅行に行ってますから、記録に出てこないわけです。

これが先ほどの軍閥ですね。軍閥はいつも風船玉が膨らんだり縮んだりしているような状態で、この時は呉佩孚・曹錕などの大きな勢力が力を持っていた時の勢力図です。それがこのあとパンと、風船がはげたように縮小してしまったりしています。こういうようなかたちで軍閥間の境界線があったということがわかってまいります。

これは四川省の一部の図ですね。一番右(東)のほうが例の、今中国の裁判で問題になった重慶でありますけど、ここはトップが日本へ留学した経験を持つ軍閥が3つ存在していました。

相互に競い合って近代化に努めたんですね。旅行記の中で、初めて図書館ができた、公園ができた、道路を広くした、バスを通したなど、日本で学んだことをそのまま地元で実現した町を記録しているんですね。ここでは、重慶から北西部の一带、成都にかけての部分だけの記録を拾い出したもので、こんなに多くの町の近代化を進めていった軍閥の姿が浮かび上がってきます。今の中国の町づくりのベースのところでは、軍閥が最初にスタートしたことがわかります。それまでの中国の町というのは、まずパブリック(公共的)な空間というのは極めて狭いというか、そんなものは作らない。公園などありません。道路へは家が張り出してくる。道端へはゴミも捨てっぱなしであるというような状況でした。そこへ初めて日本方式の町づくりをやったんですね。そういうことがわかってきます。

以上から、こんな流れ図ができます。右のほうから清国そして民国がずっと来て、すつと戦争で切れてしまって、戦後共産党政権、そして文革運動が起こって、左の方の改革開放へ続くわけですが、この真ん中が切れちゃってる。ところがこっちの右からの方でも最後の切れ口、1930年頃は資本主義的な流れが出てきていたのです。結局は1980年代以降の改革開放後は、この1930年頃の切り口とくっつけないとその後の中国っていうのは活性化しないんですね。その辺のところをきちんと知る。原点を知るというのは重要であり、ここに東亜同文書院の旅行記の持っている現代的な価値がある。その中から資本主義的な流れ、芽生え、そういうようなものを旅行記録から読み取り、現在との接合状況を分析することができるんですね。このへんは時間がないのでこれで終わりますけれど。

最後に今回、地元長崎で我々の展示・講演会開催にあたって、書院の卒業生の方から「長崎でやるのが遅すぎた」とお叱りを受けたんですけど、なぜ長崎かということですね。この会場、県美術館の運河ギャラリーのところの「東亜同文書院大学から愛知大学へ」をご覧になられた方はお分かりいただけるかと思いますが、ここの廊下にも少し展示してありますけれど、長崎とは大

変縁が深いわけです。東亜同文書院というのは、昨日の馬場先生のほうからも細かな説明がございましたけれど、基本的には教育文化事業というものをベースにしながらビジネススクールとして完成したんだということですね。日清、あるいはその後の民国期、そして現代の日中間の貿易実務あるいは貿易取引の原点というのは東亜同文書院なんです。これをもっと知って頂きたいということなんです。特に荒尾精がその着想を得た。それで自ら実践をした。日清貿易研究所、そして東亜同文書院を作った。多くの方々が貿易実務で従事した。これはもう、まぎれもなく歴史的事実なんですね。だからそここのところを現代の視点からも、もっと評価するということですね。長崎の方々が東亜同文書院へ進学した数なんですね。これは名簿を勘定して作ったんですけど、こんなかたちで長崎はやっぱ、昔の記録を見ると「長崎県上海市」なんて書いてありますけど、上海と本当に一晩でつながってしまうんですね。上海に非常に親しみをもっておられたし、上海へ渡った一般の長崎の人も非常に多いということですね。書院進学者数の一番は福岡、次は広島で次が長崎です。その各県の人口の比率から言うと、長崎は非常に高率です。書院ともそういう強いつながりがあった。直接的な関係では、昨日も出ましたけど第二革命の時(1913年)に、清国軍と革命軍の戦火の中で校舎が焼け、いったん長崎に引き揚げてくるんですね。この時は大村のお寺さんを2つ校舎として使いました。また、第二次上海事変の時(1937年)、ここに書いてあるので説明は省きますけど、長崎の女子師範へ校舎を移転します。長崎の師範学校というのは男子部と女子部がいつも校舎を交代しているんですね。なかなか平等だったのかなと思うんですけど。今の桜馬場中学校を仮校舎とした時の写真ですね。ここで勉強した。これはこの9月に撮らせていただいたんですけど。右手の方に戦後建築された長い校舎があります。日本で一番長い校舎だそうですね。200メートルを超えている。女性の校長先生から「雨の日はここで運動会ができますよ」って言われ、びっくりしました。

我々のほうの手元にある資料で、過去の写真を復元しますとこんなふうになります。左上は学生用の伝達文・通知文。右のほうは寮の部屋ですね。左下は食堂。近くの浜町あたりは繁華街で、師範からも近いですから、書院生が町に繰り出したというようなものもあります。時々高等商業学校の学生と口論をやったとかいうこともあるようですが、町の中に繰り出して、長崎の人たちも、長崎に来た書院生に非常に関心を持った。長崎市民の方々用に講演会、大旅行の調査報告の報告会をやったり、図書館では一番書院の学生が来て勉強していたということですね。近くに幼稚園がありましたから、おにいちちゃんとして、子供からも愛されていたということが記録に残っていますし、手記に残っています。再び、上海へもどれるということになって、長崎港から別れていく。その時に、書院の人たちの手記を見ますと、波止場には医科大・薬大・高等商業・女学校・小学校・幼稚園生まで来て、一番嫌われておったのではないかと思われる女学生もたくさん送りに来てくれ、ものすごく感激した、という文章が載っている。そのぐらい、長崎とのつながりは深かったということです。最後のお別れの時の船は長崎丸だそうです。これは書院の45期の岩永さんという方。眼鏡橋のところで今、岩永金物店というそうですが、その方が我々に絵葉書を送ってくれたんですけど、それがちょうど長崎丸だったんですね。それでここに出させていただきました。

もう時間がありませんので、最初に申しましたように東亜同文書院のあと、GHQのもとでは「書院」という学校の名前は使えないということで、引き揚げてきた豊橋の地に「知を愛する」というのがいいだろうというわけで、最後の学長であった本間先生が「愛知大学」として誕生させたわけがあります。なお、引き揚げの時にポストンバック一つしか持ってこれない中で、本間先生と関係の方々方がポストンバックの一番下に学籍簿・成績簿を隠して、見つかったら本間先生が全部責任を持つと言って上海から引き揚げてこられました。従って大陸にあった学校で、学籍簿・成績簿が残っているのは書院だけです。こうして引き

続き豊橋に愛知大学ができ、旧制大学としてスタートしました。1945(昭和20)年が終戦の年ですけど、46年の11月には設置が認可されたんですね。なお、ちょっとだけこぼれ話をしますと、最後の(同文書院)46期の学生たちは東シナ海を潜水艦の攻撃があるというので渡れなくて、最後は富山県の呉羽紡績の一部を利用して呉羽校舎、呉羽分校で生活するわけです。終戦と共にいったん学校は閉鎖されますが、分校の校長が、外務省に陳情書を書いた。これだけ中国との関係で我々ほうまくやってきた、こういう学校をつぶす手はない、ぜひ継続をお願いしたいと申請をしたら、よろしいという認可が来たんです。その認可をしたのは当時の外務大臣、吉田茂ですね。彼がO.K.と言った。従って、戦後東亜同文書院大学というのは復活したんです。この事実はあまり知られていない。ところが残念ながら、東亜同文書院を経営した東亜同文会の会長は先ほど申しましたように近衛文麿。戦犯扱いにされた、というわけで東亜同文会はGHQにつぶされたんです。従って経営母体もなくなってしまったんで、やむなく東亜同文書院大学は存在が消えてしまった。その時上海にいた本間先生から、すぐそれに替わるところを求めなさいという分校への指示があって、分校スタッフの教員の中に、神谷(龍男)という愛知県出身の方もおられて、豊橋でちょうど町が焼けてしまった隣りに予備士官学校の建物がそのまま残っているというわけで、すぐそこにツバをつけたといいますかね、それで愛知大学が誕生したんです。しかし、東亜同文会はつぶされたわけですね、GHQに。そして同会の建物はGHQに接收されることになったのです。その東亜同文会の建物の中には、中国に関する多くの資料・書・本、学生たちがカーボン紙で書いた旅行報告の複本などがたくさんあった。それを聞きつけて呉羽分校からの学生たち、先生や有志が東京に駆けつけて、接收される前の晩にトラックに全部かき出した。そうでないとアメリカが全部持ってってしまう。それで隠して、愛知大学が新しくスタートする時に図書がないとどうにもしようがないということで、それを図書としてカバーした。こうして、全

国で焼け残った古本屋さんから1万冊集め、それと東亜同文会からトラックでかき出してきた3万5千冊、計4万5千冊で愛知大学がスタートできたのです。これはまさにドラマチックな歴史を持った学校の誕生でした。そういう点では、いつも塀の上を歩いていたといえますか、そういう中で愛知大学が実現したんですね。

最後に、愛知大学と長崎との関係について、東松照明という卒業生を挙げることができます。写真家の方で、長崎での被ばくを体験された方をずっとフォローしながら写真で記録された方ですね。もともとこの写真は大学時代に入選した作品で、非常に才能のあった方だというのがわかります。この前、沖縄で亡くなられてしまったんですけど、沖縄でも活躍された方ですね。ちなみにこの会場には若い頃にアフガニスタンで撮った写真も何点か紹介していますね。

それからもうひとつ。荒尾精という最初に名前を出しました、あの人に徹底して中国語を教えた、地元長崎出身の御幡先生という方がおられて、熊本で徹底的に教えるんですけど、この方のお墓が長崎にあります。これはその墓がある皓臺寺です。前回来た時に、ここにお墓があるらしいというのでお邪魔して、一生懸命お墓を探しました。その結果、右下のようなお墓が残っておりました。もう草にうずもれて、ほとんどお世話ができていないのですが、これを今後どうしようかということでもあります。大変急傾斜な山の斜面にあって、探し出すのが大変でしたけど。こういうお墓も長崎にあります。

時間をオーバーいたしましたけど、終わらせていただきます。

小林 藤田先生、ありがとうございます。時間の都合上、質疑応答はなしといたします。藤田先生にもう一度拍手をお願いいたします。